

◆連作推理小説

動詞の考察

佐野 洋

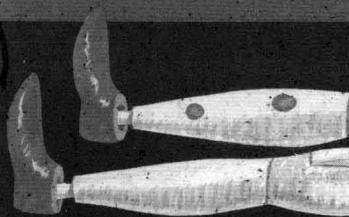


◆連作推理小説

動詞の考察

佐野 洋

実業之日本社



動詞の考察

一九九四年十二月三十日 初版発行

著者 佐野 洋

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集)

〇三(三五三五)四四四一(販売)

振替〇〇一―〇一六―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

TEL 〇六(三一一二)一五七三

印刷 大日本印刷

製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-53244-4

©Y.SANO 1994
Printed in Japan

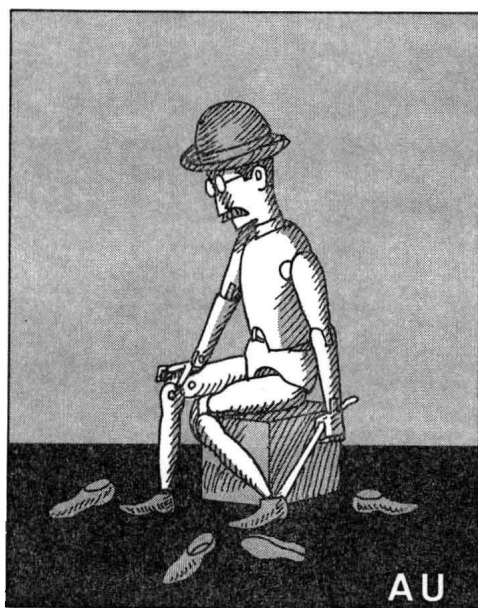
動詞の考案・目次

あ と が き	割 る	料 る	や る	も る	張 る	眠 る	と る	す る	切 る	合 う
260	235	209	179	155	131	101	73	51	29	5

装画／安里英晴
装帧／安彦勝博

動詞の考察

合
う



あ・う

- 1 一緒になる。
- 2 あてはまる。
- 3 互いに調和する。
- 4 つりあう。
- 5 合致する。

(『広辞苑』より)

テレビの正面に肘掛けのついた一人用のソファがある。そこが、リビングにおける矢代昭夫の指定席であった。

と言つても、彼のいない間は、長男の悟が大威張りでそこに座っているらしいが……。

久しぶりのゴルフから帰り、手を洗い終えた矢代が、その指定席に腰を下ろすと、妻の映子がビールの中瓶とグラスを運んで来た。

ゴルフ場までの往復、矢代は自分で車を運転することが多い。プレー後のビール一杯ができないので、帰宅直後に、喉を潤すことになる。だから、映子がビールを運んで来るところまでは、いつもと同じだった。

違ったのは、そのあとである。映子は、矢代のグラスにビールを注ぐと、そのまま、すぐ脇のソファに腰を落着けた。

「うん？　悟は？」

と、矢代は聞いた。

「お隣り……。健一君が、新しいゲームソフトを買ったんだって……。それより……」

映子は、矢代の顔をのぞき込んだ。「きょうのゴルフ、お義父さんと一緒だったのでしょう？」

「ああ、おやじはまだ元気だよ。どうかすると、おれより飛ばすから……」

父の直也は、去年、悠々自適の生活に入った。最初の勤めを六十歳で定年になり、子会社の役員をやっていたのだが、それも六十五歳で退任したのだ。

ただ、もともと出て歩くのが好きなので、映画を見たり、カルチャーセンターで墨絵を習ったり、結構忙しいのだ、と、きょうもゴルフをしながら、嬉しそうに話していた。

「嘘じゃないでしょうね？」

と、映子が念を押した。

「何言っているんだ」

矢代は、口の回りのビールの泡を拭いた。「そんなことで、嘘をつくはずはないじゃないか」

「とは思ったのだけれど……」

と、映子は首をかしげている。

「何かあったのか？」

「ねえ、お義母さんは、サッカーなんか嫌いでしょう？」

「うん、嫌いというよりも、お袋にとつて、世の中にスポーツは存在しないも同じなんだよ。サッカーだけでなく、野球もラグビーもゴルフも……。要するに、自分には関係のない、まるでUFOみたいなもんだろう」

「でしょう？　だから不思議なのよ」

映子は、肩をすくめた。「お義父さんが、ゴルフに行っている留守に、ボーイフレンドでも遊びに来たのかな」

午後、ちょっとした用があつて、映子は義母に電話をかけた。本来は、簡単な用件だったの

だが、話はなかなか通じなかった。原因は、電話の背後のテレビだった。その音量が大きいため、映子の声が、母に聞き取れなかったらしいという。

「大歓声と、それに何だか知らないけれど、ピーピーという笛みたいな音がして……。電話が終わってから、新聞で調べたら、サッカーの中継をやっていたの。それ以外は、ゴルフとか舞台中継だから、あんなに騒がしくないわ」

「ふうん」

矢代も首をかしげた。たしかに、母とサッカーとは結びつかない。

母の美佐子は、父と反対に、家の中で編物をしたり、本を読んだりが好きであった。と言っても、編物や読書に打ち込んでいるのではなく、家事の合間にそれをするという程度だった。が……。

「里美一家が、遊びに行っていたのかな？ 越智君は、スポーツ好きだから……」

妹の里美の夫、越智は高校の教師をしている。ときどき、娘の千恵美を連れて、一家で父の家を訪ねたりしているようだ。

「でも、越智さんだったら、お義母さんに電話がかかって来たら、テレビを小さくするわよ」
「それもそうだ。しかし、ボーイフレンドだって、それは同じだろう？ 電話があったら、テレビの音を小さくするのは常識だもの」

「それと、変だなと思ったのは、お義父さんのところ、親子電話になっているのだから、テレビの音がうるさかったら、お義母さん、子機を持って別の部屋に行けばいいのに、それもしな

合 う

かった……。そんな風に考えたら、いろいろな不思議でしようがないの。あなた、帰りはお義父さんを、マンションまで送ったのでしょうか？」

「いや、きょう行ったのは、おやじのホームコースだから、おやじはクラブをゴルフ場のロッカーに預けてあるんだよ。それで、荷物が無いから、電車の方が早いと言ったんだ」

「そう……」

映子は、まだ納得できないという顔をしていた。

最初の通報は、妹の里美からだった。

「大変、お母さんが……。いま、救急車で病院に運ばれたんだけど」

あの、映子が『妙なことがある』と言ってから、一か月近く経った夜のことだった。

珍しく早く仕事が終わわり、八時ごろ帰宅すると、そこに電話がかかって来たのだ。

「救急車って、どうしたんだ？　それで、おやじは？」

これまで、母が急病で倒れることを、矢代が予想したことはなかった。母は、多少血圧が低かったが、ほかはすべて正常だと言っていた。急に倒れるとすれば、高血圧気味の父の方だと、ひそかに考えていた。

「それが」

里美は、声をひそめた。「お父さん、いないのよ。それに……。とにかく来てちょうだい

よ。変なことになっていて、あたしの手にはおえないわ」

母は、結局助からなかった。そして、母と一緒にいた男も……。

警察の調べでは、二人とも窒息死であった。密閉した寝室で、ガスストーブをつけっ放しにしていたため、部屋の空気が酸欠状態になったということだった。

その夜、里美は近くに用があったので、父のマンションを訪ねたところ、ドアに鍵がかかっている。しかし、彼女は合鍵を持っていたので、それで解錠したのだが、中からドアチエインがかけられていた。

チエインがかかっている以上、中に人がいるはずだ。里美は、そう思って、管理人に連絡、チエインを切ってもらって、部屋に入ってみると、寝室で……。

「最初は、ベッドに寝ている男の人が、お父さんだと思ったの。ところが、全然知らない人でしょう？　焦ったわ」

仮りに、もっと早く、その事実に関がなくても、里美が何らかの手を打つことは不可能だったろう。ドアを開けるのに、管理人の助けを借りている以上、事実の隠蔽^{いんぺい}は無理であった。

その男の身元は、すぐにわかった。管理人が、

「これ、宮城さんのご主人じゃないですか」と、叫んだのだ。

『宮城さんて?』

『お隣り503のご主人です』

警察では、最初、心中事件の疑いを持ったらしい。

マンシヨンの隣り同士に住む男女が親しくなった。しかし、双方に配偶者がいるし、こどもや孫もいる。それらのしがらみを考えれば、一緒になることはできない。それで、心中を……という解釈である。

心中の場合、いわゆる司法解剖が行われる。どちらかが仕掛けた場合、殺人事件として処理されるからだ。

さらに、矢代たちには知らされなかったことだが、警察は第三者による殺人の可能性も検討したようだ。第三者というのは、矢代の父および隣りの奥さんである。

矢代の父・直也が、マンシヨンに帰って来たのは、午後九時近くであった。しかも、死んだ宮城喬の妻小夜子と同じタクシーで帰って来たことが、近所の人たちに目撃されていた。

警察の事情聴取に、直也は丸の内に映画を見に行ったのだが、映画館の中で宮城夫人に遭ったので、終わったあと、一緒にお茶を飲んで帰って来た供述、それは宮城夫人の話とも、大筋において一致した。

そこで、こういう仮説が生まれたのだ。

矢代の父と宮城夫人小夜子はお互いの配偶者同士が、いわゆる不倫関係を持っていることを知り、共謀の上、彼らの外出中に、ガス事故が起きるように、湯沸かし器に細工をしたという仮説。

しかし、ガス器具には細工の跡が認められなかったし、解剖結果にも不審な点が見当た

ず、事故という結論が下されたのだった。

そのあとが、大変だった。

隣室の宮城は、ある地方新聞の東京支社長を務めたあと、関連テレビ局の東京駐在顧問などをやって、一年前に年金生活に入った人物であった。つまり矢代の父親と、似たような境遇にあった。娘夫婦が、横浜に住んでいて、ときどき孫を連れて遊びに来るところまで、そっくりであった。

社会人として一応の仕事を終えた男と、やはり夫が同様な生活に入っている女とが、親しくなり、同じ部屋で不慮の事故に遭った。しかも、二人はからだに、何もまとうていなかった。日本は、これから高齢化社会に向かうと言われている。それだけに、こういう問題つまり、高齢層の婚外恋愛は増えるのではないか。二人の死は、まさにそんな時代を象徴している。マスコミは、このように考えたらしい。テレビ局のレポーターが、マンシヨンの近辺をうろつき回り、週刊誌の記者は矢代のところにも取材に来た。

だが、宮城のかつての部下たちが奔走して各テレビ局に頼み込み、また矢代も勤めている出版社の上司や同僚の力を借りて、週刊誌に手を回したから、テレビや週刊誌で報道されることは、どうにか防ぐことができた。

事後処理の一つとして、父をどうするかという問題があった。

父は、最初のうち、このままでいい、と主張していた。

「別に何ということないだろう。昭夫や里美のところに置いて貰って、迷惑をかけるのも嫌だしね」

矢代の家での話し合いで、直也はそう言った。何の問題もないだろう、というように平然とした表情をしていた。

「駄目よ。そんなの」

即座に反対したのは、里美だった。「第一、お父さん、お母さんが別の男の人と死んだ部屋で寝るのが、嫌じゃないの？」

「そんなこと何でもないさ。伝染病で死んだわけでも、刃傷沙汰があったわけでもない。それに、あのマンションには、母さんとのいろいろな思い出もある」

「思い出なんて……。そのお母さんは、よその人と一緒に死んだのよ。思い出も糞もないじゃないの」

「そういうなよ。まあ結果はああったが、おれたちは、別に喧嘩していたわけではないし、結構うまくやっていったんだ」

「兄さんはどう思う？」

里美は、どうしようもないという風に手を広げて、矢代の意見を求めた。

「お父さん」

矢代は、改まった呼び方をした。いつもは「おやじさん」と呼んでいる。「あのマンション